

武蔵野日曜聖書講筵 聖霊降臨節  
聖霊降臨

——使徒行伝第2章1～11節——

1996年5月26日

小池辰雄

愛霊 圧倒されて信ぜしめられる 聖書身証 経済大国は精神小国 我に帰れ 聖霊の土台は十字架 人間は二重構造 聖書は私が書いた本 永遠の生命 聖書は一番楽しい力強い本

【使徒2】

1 五旬節の日となり、彼らみな一処ひとところに集い居りしに、<sup>2</sup> 烈しき風の吹ききたるごとき響、にわかひらに天より起りて、その坐する所の家に満ち、<sup>3</sup> また火の如きもの舌のように現れ、分かれて各人のうえおのに止まる。<sup>4</sup> 彼らみな聖霊に満たされ、御霊の宣べしむるままごとくに異邦の言にて語りはじむ。

<sup>5</sup> 時に敬虔なるユダヤ人ら天下の国々より来りてエルサレムに住み居りしが、<sup>6</sup> この音おこりたれば群衆あつまり来り、おのおの己が国語にて使徒たちの語るを聞きて騒ぎ合あひ、<sup>7</sup> かつ驚き怪しみて言う『視よ、この語る者は皆ガリラヤ人ならずや、<sup>8</sup> 如何にして、我等おのおのの生れし国の言をきくか、<sup>9</sup> 我等はパルテヤ人、メヂヤ人、エラム人、またメソポタミヤ、ユダヤ、カパドキヤ、ポント、アジヤ、<sup>10</sup> フルギヤ、パンフリヤ、エジプト、リビヤのクレネに近き地方などに住む者、ロマよりの旅人——ユダヤ人および改宗者——<sup>11</sup> クレテ人およびアラビヤ人なるに、我が国語にて彼らが神の大なる御業をかたるを聞かんとは』

●愛霊

「ペンテコステ」というのは、キリストの復活から「五十日目の日」という意味です。「聖霊降臨」というのは、内容からいった言葉です。使徒行伝第2章です。

1 五旬節の日となり、彼らみな一処ひとところに集い居りしに、<sup>2</sup> 烈しき風の吹ききたるごとき響、にわかひらに天より起りて、その坐する所の家に満ち、<sup>3</sup> また火の如きもの舌のように現れ、分かれて各人のうえおのに止まる。

これは素晴らしい聖霊の現象ですね。

<sup>4</sup> 彼らみな聖霊に満たされ、御霊の宣べしむるままごとくに異邦の言にて語りはじむ。



よその言葉が自然に語られる。

「あれはガリラヤ人なのに何故知っているか?」

と、驚いている。そういう不思議なことが起きた。彼らは知らなくても、ちゃんと示されて、そういう特別な異言が語られている。非常に異常なことが起きたわけです。

「神」は誰にもわかりません。神というのは不可知です。霊的な存在で、ただキリストが特に「父なる神」という言い方をされたわけです。

「神・キリスト・聖霊」

これは「三位一体」という。人間の側からは量ることができない。それが神です。

「神は霊であるから、拝する者は霊と真をもつてせよ」

とキリストが言われた。正に神は聖なる霊です。だから、聖霊の別名は神であり、神の別名が聖霊であると言つてもいいくらいです。聖なる霊です。それはそうなんですけれども、私はむしろ愛の霊、愛霊、といたい。

「神は愛なり」

と聖書にもある。神さまは孤独でない。愛する対象がある。それは神の子、キリストです。キリストは神に愛されている。我々はまたキリストに愛される。愛するというのは、ただ「かわいがる」という意味ではない。助けるということです。己の本質をもって相手を助け救う。それが愛の内容です。また、その神の本質を、愛せられたものを通して現したもう。キリストは正に、神の本質を体現された方です。身体をもって存在で現した。我々はまた、キリストを現さなかつたら、クリスチャンなんていつでも意味がない。

「キリストを信ずる」

という言い方はおかしな言葉です。「信ずる」のではない。キリストに圧倒されて、キリストを現さざるを得ない。体現者、被圧倒者です。我々はキリストの愛に圧倒されて生きている。我々が愛するからではない。

「愛は神より出づる」

とヨハネ書翰にも書いてありますが、愛のもととは神さまの方だからね。こつちではない。ヨハネ第一書4章13節に、

「神、御霊を賜いしに因りて我ら神に居り、神われらに居給うことを知る。」(ヨハネ4・13)

という非常に著しい言葉がある。我々は聖霊を受けなかつたならば、「神に居る」ということとは言えないわけです。「キリストに居る」ということも言えない。「神・キリスト・聖霊」は離すことができない三位一体であります。大体、

「神は霊なれば、拝する者も霊と真とをもて拝すべきなり」(ヨハネ4・24)

とキリストが言っておられたからね。「神・キリスト・聖霊」というこの三つの言い方は同じ内容であるわけです。もちろん、神がもとです。



## ● 圧倒されて信ぜしめられる

キリストは神に愛された。キリストが愛したのではない。神に愛された。愛されるといふことは、神を体現する使命と義務がある。

「我なに<sup>ごと</sup>ことをも為しあたわず」

とヨハネ伝に書いてあるとおり、キリストは何もできない。

「何もできません、何も言えません、ただ神さまがさせてくださるし、言わせ

てくださるだけのはなしです」

と。イエスというひとは完全に受け身で、ゼロなんだ。無者なんだ。無者だと無即無限無量で、神という無限無量の内容がキリストを通して自由自在に顕れる。我々はキリストの無限無量を自由自在に顕したら、それは本当のクリスチャンです。ただ信じているようなのはクリスチャンではないんだ。「信ずる」というのは本当はおかしな言葉だ、躓きの言葉だ。

「私はキリストを信じています」

なんて、信ずることが自分の何ものであるかと思っっている。そんなものではない。こっちは空っぽなんだ。もし言うなら、キリストに圧倒されて信ぜしめられるということですよ。受け身なんだ。だから、

「私を見た者はキリストを見たのである」

と、これが本当のクリスチャンなんだ。

「わがうちなるキリストが見えませんか」

と。そういうキリストの体現者です。

## ● 聖書身証

賀川豊彦は本当にキリストの体現者です。彼の生涯を見ると、実にいろいろな苦難を通して可哀相な人、病める人の相手になって、それを助けた。私は近代の日本のキリスト教界で第一人者はこの賀川豊彦だと思っっています。無教会の先生方ではない。私は賀川さんを最も尊敬しています。私は無教会に育ちましたが、無教会はまだ観念です、観念的などころが多い。聖書の勉強はよくする。聖書の研究ばかりやっている。しかし、大事なものは体現ということ、生涯そのものをもって苦難をおしてキリストの証者、証し人であるということ。聖書研究ではない。聖書身証です、身体<sup>からだ</sup>でもって証しすること。聖書を生きたければしょうがない、我々自身が活ける聖書とならなければ。

ヨハネ第一書の4章は大事なところですよ。

「<sup>13</sup>神、御霊を賜いしに因りて我ら神に居り、神われらに居給うことを知る。

14又われら父のその子を遣<sup>つか</sup>して世の救主<sup>すくいぬし</sup>となし給いしを見て、その証しをな

すなり。<sup>15</sup>凡<sup>おおよ</sup>そイエスを神の子と言いあらわす者は神かれに居り、かれ神に

居る。



神と共在、内在している。

16 我らに対する神の愛を我ら既に知り、かつ信ず。神は愛なり、愛に居る者

は神に居り、神もまた彼に居給う。」(ヨハネ一4・13～16)

「愛する」というのは、その人と一つになってしまうということです。そして、その本質を表す。人助けをする。必ずまた人を愛する。西郷南洲は

「敬天愛人」

と言ったでしょ。縦の「敬天」があると、本当の横の「愛人」に、人を愛することになる。西郷南洲の「敬天愛人」というのは素晴らしい言葉だ。西郷というのは大変なひとだ。

### ● 経済大国は精神小国

とにかく、この頃は人物がいなくなつたね。この頃の教育は大体、学校の先生が小学校から大学にいたるまで本当の人物教育をしないから。日本の民主主義なんてだめだよ、観念化してしまつて、平板化してしまつてき。私は嫌いだね、この民主主義というやつは。言葉そのものは大事な内容なんだけれども、民主主義が身勝手主義になつてしまつている。

「自分さえよければいい」

なんて、とんでもない。

電車に乗つてもわかりますよ、お年寄りが立つていて、若いのが坐っているなんて、そんなことはドイツでは見たことがない。ドイツでは必ず若い人は立ちます。年取つた人を腰掛けさせます。どうも今の日本は精神的にだめだね、三等国ではないかな。日本は自分の精神的な貧困でだめになる。「経済大国」なんて、何を言ってるか。精神大国にならないければだめなんだ。我々は、この福音を受けとつた者は、そういう意味でもつて本当の真理の戦いをしていかなければ。男の方でも女の方でも、勇ましくやっってくださいよ、真理の戦い、福音の戦いを。フランスのジャンヌダルクという女性は素晴らしい戦いをした人だね。大体、「何々主義」「何々イズム」といつて、真理を主義化したものはだめなんです。あの大詩人のゲーテもイズムが嫌いだった。今の若い人たちは、第一流のものを読まなくてはね。第一流のものを読まなければしょうがない。学校の先生は一体何をしているのかな、小学校から大学まで。私は大学で学生に、

「とにかく、ヨーロッパの文化の根底は聖書だから、聖書を読まなくてはだめだ」とはつきり言つたんだが、あまり読まない。大体、

「聖書はどこに売ってますか?」

なんてやっているから。情けないね、全く。経済大国は精神小国だ。皆さんの生涯は真理の戦いですから、福音の戦いですから、大いに勇ましくやっってください。



## ●我に帰れ

ヨエル書2章12節から、

「然れどエホバ言いたもう 今にても汝ら断食と哭泣なげきと悲哀かなしみとをなし心をつくして我に帰れ。

この「我に帰れ」というのが大事な言葉です。神さまのもとに帰る、キリストのところに帰る。我々は、帰り行くべきは神・キリストです。

13 汝ら衣を裂かずして心を裂き

生まれつきの人間的な心を裂いて、

汝等の神エホバに帰るべし。

神エホバに帰ると、神さまから本当の力がくるぞと。

彼は恩恵めぐみあり憐憫あわれみあり、かつ怒ることゆるく愛憐大いづくしみおおひにして災害わざわいをなすを悔いたもうなり。

おもしろい言い方だね。

14 誰か彼のあるいは立ち帰り悔いて、祝福めぐみをその後にとめのこし、汝らをして素祭そさいと灌祭かんさいとをなんじらの神エホバにささげしめたまわじと知らんや。

必ず神さまはそういうように導いてくださるぞと。

「悔い改め」という言葉があるけれども、あれは本当は「立ち帰る」という言葉なんです。「悔い改め」という言い方はあまりよくない。神さまに立ち帰ることです。悔いて改めたつてしようがないんだ。立ち帰らなければだめです。

「悔い改めよ」

というのは本当は、

「立ち帰れ」

という意味なんです。「悔い改め」という訳はよくない。

……28その後われわが霊を一切の人に注がん。

これは神さまの言葉です。

汝らの男子女子むすこむすめは預言せん。汝らの老いたる人は夢を見、汝らの少き人わかは異象まぼろしを見ん。29その日我またわが霊を僕婢しもべはしために注がん。30また天と地に徴証しるしを顕さん即ち血あり火あり煙の柱あるべし。31エホバの大なる畏るべき日の

来らん前に日は暗く月は血に変らん。

先ず審判が行われることを言っている。審判のあとに恩恵がくるというわけです。

32 凡てエホバの名を呼ぶ者は救わるべし。そはエホバの宣のたまいし如くシオンの山とエルサレムとに救われし者あるべければなり。其の遺のこれる者の中にエホバの召し給えるものあらん。」(ヨエル2・12…32)

ここに「遺れる者」という言葉がありますが、これはイザヤ書に出てくる言葉です。エレ



ミヤにもあります。イザヤ、エレミヤというのは旧約の大事な預言者です。時々、旧約の偉大な預言書を読むといい。イザヤ書41章8節、

「<sup>8</sup>然<sup>され</sup>どわが僕イスラエルよ、

イスラエル全体を「わが僕」と言っている。

わが選めるヤコブわが友アブラハムの裔<sup>すえ</sup>よ、

「イスラエル」も「ヤコブ」も同じことです。

<sup>9</sup>われ地のはてより汝をたずさえきたり、地のはしよりなんじを召し、かくて汝にいえり、汝はわが僕われ汝をえらみて棄てざりきと。……

これからも棄てないと。そして、神さまのことを「イスラエルの聖者」と言っている。

<sup>14</sup>またエホバ宣<sup>のたも</sup>給う、なんじ虫にひとしきヤコブよイスラエルの人々よ、おそるるなかれ我なんじをたすけん。汝をあがなうものはイスラエルの聖者<sup>しやうじや</sup>なり。」(イザヤ41・8…14)

この「聖者」(カードーシユ)という言い方はイザヤの言葉です。また「非常に重い」という意味ももっている。

### ●聖霊の土台は十字架

聖書は研究する本ではない。聖霊を受けなければ本当は読めない本です。聖霊の土台は十字架です。

「われキリストと共に十字架せられたり。最早われ生くるにあらず」

とパウロが言ったでしょ。あのパウロと同じように、キリストの十字架を本当に受けとって、生まれつきの自分に死ぬと、そうしたらば今度は、聖霊がやってきて、新しく生きる。新生です。新しい生命、これが本当の世界なんです。本当の神交の世界はその二段構えです。

十字架と聖霊は離すことができない関係にある。キリストは十字架にかかつて、三日目に甦<sup>よみがえ</sup>って、そして今度は、聖霊をみんなに受けるように活動をはじめた。四十日間。始めの四十日と次の十日。キリストの復活から五十日目<sup>が</sup>五旬節の聖霊降臨になったわけです。

「復活」という言葉も躓<sup>つまず</sup>きになる。「また生き返った」という意味ではない。新しい霊的な生命に展開することです。ローマ書6章5節、

「<sup>5</sup>我らキリストに接<sup>ま</sup>がれて、その死の状<sup>さま</sup>にひとしくば、十字架と一緒にあって、

その復活にも等しかるべし。<sup>6</sup>我らは知る、われらの旧き人、生まれつきの自分というものは、

キリストと共に十字架につけられたるは、

即ち、罪の贖いの十字架で旧き我に私たちは本質的に死んだ。そうすると、

罪の体ほろびて、此ののち罪に事<sup>つか</sup>えざらん為なるを。<sup>7</sup>そは死にし者は罪よ



り脱<sup>のが</sup>るるなり。我等もしキリストと共に死にしなければ、また彼とともに活  
きんことを信ず。

パウロは仮定で言っているけれども、

「キリストと共に死んだから、また彼と共に活きたのである」ということです。

9 キリスト死人の中より甦<sup>また</sup>えりて復死に給わず、死もまた彼に主とならぬを  
我ら知ればなり。

これははつきり、パウロは言っているわけです。

10 その死に給えるは罪につきて一たび死に給えるにて、その活き給えるは神  
につきて活き給えるなり。

そして、我々に神・キリストの新しい生命、「永遠の生命」をいただく。キリストを受けると、我々は永遠の生命であるから、我々は死ぬということはない。相対的な死はあっても、我々の存在そのものは死なない。永遠の生命だから。

11 斯くのごとく汝らも己を罪につきては死にたるもの、神につきては、キリ  
スト・イエスに在りて活きたる者と思ふべし。」(ロマ6:5～11)

「活きたる者と思ふべし」というのは

「活きた者であるぞで

ということですよ。

### ●人間は二重構造

「罪、罪」というと、

「何か悪いことを思ったりしたりすることが罪か」

と思うと、そうではない。この「罪」という言い方は

「生まれつきの自分」

ということですよ。「罪びと」というのはそういうことなんだ。我々は「罪びと」にして「義人」なんです。生まれつきの我々というものはいつまでもある。しかし、本質はキリストの義をいただいているから義人なんです。ルターもそのことをはつきり言っている。人間というものは「二重構造」になっている。

「罪びとにして義人なり」

ということ。

キリストを受けとって、いわゆる相対的な死はあっても、死なない。永遠の生命をいただいている。それが義人なんだ。神さまの御意を行うことができる力を聖霊によっていただいている。それが義人なんです。「義」というのは「正しい」という意味ではない。御意を行うことが「義」なんです。旧約聖書からずうつとこの義という言葉が貫いている。こ



これは非常に内容の深い言葉です。「義」はギリシア語では「デユカイオス」という。

「愛」というのは、人を助ける、人を救う、「アガペー」という字です。「エロース」ではない。天来の愛のことを「アガペー」という。ローマ書13章8節、

「汝等たがいに愛を負うのほか何をも人に負うな。人を愛する者は、律法を全うするなり。」

そのとおりです。「愛は律法を全うする」とはパウロの言葉です。

9 それ『姦淫する勿れ、殺すなかれ、盗むなかれ、貪るなかれ』と云えるこの他なお誠命ありとも『おのれの如く隣を愛すべし』という言の中にみな籠るなり。

キリストは、

「自分を憎まなければ私の弟子とはなれない」

と言った。よく「ご自愛ください」と手紙に書くけれども、「自愛」というのは本当はよくない。これは「敬天愛人」を言った西郷南洲もそう言っている。

「自分を愛するのはだめだ、人を愛するのだ」

と。ひっくり返らないと。自分をマイナスに、人をプラスにしなければだめだというわけです。マイナスを取って、プラスを人にやれということです。

「おのれの如く隣を愛すべし」

というのは、

「自己愛は本能だけれども、その本能をひっくり返して隣人を愛せ」

ということですよ。

「己を愛することを肯定している」

と読んでだめですよ。

「己を愛するのは本来、人間の本能だけれども、その本能をひっくり返して、人を

愛せよ」

ということですよ。

「己を憎まなければわが弟子となることはできない」

とキリスト自身が言っているんだ。自分を問題にしないというわけですよ。

10 愛は隣を害わず、この故に愛は律法の完全なり。(ロマ13・8、10)

キリストの愛がくると、「すべし、すべからず」という律法は要らない。自己犠牲をして、人を助けていく。

「友のために己の生命を棄つる。これより大なる愛はなし」

という言葉があつたでしょ。あれなんです。自分自身をマイナスにすると、今度はキリストのプラスが入ってきますから、楽しくて力が来てしまうがない。



## ●聖書は私が書いた本

それは自分をマイナスにして、「ゼロ」にしてなければだめです。そのゼロも、自分で悟つてなるのではない。キリストからいただいたゼロだから。パウロが言った、

「われキリストと共に十字架せられたり」

というゼロなんです。そうすると、キリストの生命が、愛が力がやってくる。そして今度はキリストと一つになる。キリストを信じているのではない。キリストと一如の世界です。「如」というのは「ごとし」という意味ではない。一つになっていることです。

「我と父とは一つなり」

とキリストは言われたでしょ。我々は

「キリストと私は一つである」

と言えるわけです。これは恵みの世界です。聖霊が入ってくると、そうなる。今日は聖霊降臨節だから、そういうキリストの霊を遠慮なく受けとらなくては。

「神・キリスト・聖霊」という三位一体を受けると、えらいことになってくる。楽しいし、力は来るし、人助けをするし、こんなありがたい生活はないわけです。何をしていますが、それがどんどん出来上がっていく。生活が一新するわけです。だから、「信ずる」なんていう言葉ではない。

「私は聖書と一つですよ」

ということ。

「聖書は私が書いた本ですよ」

と言つてもいいくらいなんです。それほど一つになってしまふ。皆さん、そういう気持ちに分かるでしょ。楽しいでしょ。私はお説教しているのではないから、告白しているのだから。

## ●永遠の生命

「愛は一切に勝つ」(アモール・オムニア・ヴィンキット)

というのはヒルティの言葉です。「勝つ」ということは、相手を倒すことではない。相手を「救い上げてしまふ」ことです。

十字架と聖霊と復活の生命は離すことができない。永遠の生命ということなんです。

「われキリストと偕に十字架せられたり。最早われ生くるにあらず、キリス

ト我が内にありて生き給うなり。」(ガラテヤ2・20)

「キリスト我が内にありて生き給うなり」

というのは、

「聖霊のキリストが、キリストの聖霊が、私の中に生きてくださっている」ということです。ローマ書8章9節、

「然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居るな



り。キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。  
神・キリストの聖霊がなければ、キリスト者とはいえない。

10 若しキリスト汝らに在さばいまからだ体は罪によりて死にたる者なれど霊は義によりて生命に在る。11 若しイエスを死人の中より甦えらせ給いし者の御霊なんじらの中に宿り給わば、キリスト・イエスを死人の中より甦えらせ給いし者は、汝らの中に宿りたもう御霊によりて汝らの死ぬべきからだ体をも活かし給う。」(ロマ8:9～11)

「……たまわん」

という訳し方は、ギリシア語の未来形で書いてあるからそうだけれども、みな現在形の、

「……たもう」

でいいんだ。私に訳させれば、これはみな現在形に直してしまう。本当の神交の世界は現在の断定的な言い方ですから、

「そうなるだろう」

ではない。未来のことも現在としてはつきりと言えればいい。それでない、私は読んで気が抜けてしまうね、

「何々たまわん」

なんて言われると「たもう」

とはつきり断定的にものを言わないと力が来ないんだ。

### ●聖書が一番楽しい力強い本

ローマ書8章は全部凄い。大したもんだ、新約聖書というのは無駄がない。旧約には無駄があるけれども。コリント前書13章なんかも素晴らしい所だ。12章から15章までは素晴らしい。とにかく、新約聖書は読んで楽しいし、力がくるし。もう、聖書は毎日読まなければだめですよ。御飯を食べることは忘れないように、聖書を読むことを忘れてはだめだ。

「今日はまだ聖書を読んでいなかった」

ということだったたら、読んでから寝ないと。そうしたら、よく眠れる。本当ですよ。聖書が一番楽しい、一番力強い本ですから。棚の上に飾っておく本ではない。私は聖書を二冊買って、一冊をその部分部分に破ってポケットにいれては、電車の中でも読んだことがある。いい加減な本なんか読んでられないですよ、聖書が素晴らしいから。

これは「キリスト道」だ。「キリスト教」ではないんだ。私は「教」という言葉が嫌いだ。道なんだ。歩かなければだめだ。「教え」というと、頭で理解しようと思う。理解なんていうものではない。身体に付けなければだめなんだ。

